

コミュニティ形成に果す生産組織の役割

阿部健一郎・柴田昭治郎・石山 六郎・渋谷 功

(秋田県農業試験場)

A Study on the Functions of Agricultural Cooperative Group for an Advance in Community

Ken-ichirō ABE, Syōjirō SHIBATA, Rokurō ISHIYAMA and Isao SHIBUYA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

経済の高度成長期以降、兼業化による農村住民の等質性の喪失、生活様式の多様化等が、「むら」の人間関係を変質させてきた。「むら」の変容、弱体化は、農民層分解や生産力発展の現段階に対応する歴史的なものであるが、今この空洞化から脱するための活力ある地域組織を、いかに再建していくかが問われている。

そこで本報告では、各種機能集団、特に農業生産組織が、コミュニティ形成に果す役割の解明を目的とする。集団的な営農の推進による経営の複合的な拡大は、専業農家の増加と婦人の農業従事者を多くし、地域農業推進主体を層として形成させ、活力ある「むら」づくりを促進することについては、すでに報告した¹⁾。ここではコミュニティ形成のもう一つの側面、生産組織活動の強化による住民の面接性の拡大と、組織活動におけるリーダーの役割に課題を限定したい。

このための研究対象としては、集団的な組織活動の顕著な農業地域として、大雄村宮田地区をとり上げた。

2 地区の概要

大雄村は横手市の西方約10kmに位置する平地農村で、村内の労働市場が小さく、米と出稼の村である。村は29の農業集落から構成され、集落によって農業条件の差は大きい。

宮田地区の農家数は33戸で、1戸当り耕地面積は165aと、村の平均的な集落である。しかし、専業農家は21% (昭52、同年の村平均が5%) で、水田率も82% (村95%) と低い。これは水田転換によって、ホップ・みつばの拡大部門が導入・拡充されたことによるものである。

宮田地区には、この2つの部門の生産組織に加え、集落農場組合及び宮田農事研究会 (以下「農研」) がある。そして、集落農場組合は、「農研」、稲作集団栽培・ホップ・みつば部門を含めた重層的な集団組織としての性格をもっている。また、「農研」の会員 (25人) は、いずれの組織にも参加しており、地区の集団的な営農活動を推進する主体となっている。

3 「農研」活動の強化と面接性の拡大

「農研」は、25年の活動経験を持ち、この間、表1に示した集団的な学習・研究活動を強化してきた。そして、これらの集団活動を発展段階によって区分すれば、①研究会期、②集団栽培期、③集落農場期の3つに区分できる。各段階の集団活動を通して特徴的にいえることは、その集団組織がつねに拡大されてきたことである。その要因は第1に所期の経済的な成果を確実に手にする技術・人間関係を保ってきたこと。第2は共同化の形にとらわれず、最も運営が容易な方向を模索してきたこと。つまり②段階での属地を加味した4班編成の田植共同作業、③段階では表2に示した集落こぞって、しかも緻密な計画性を持つホップ収穫共同作業等がその一例である。表3は、生産組織の部落会館利用回数を示したもので、午後から夜にかけて、20人以上の集会が多い。この他にホップ乾燥場、みつばハウス

表1 宮田農研の年次別の主な行事

昭 年	稲見会・ 調査研究 (回)	講演会 先進地研修	総会・恵比 須講など	備 考
30	5		1	研究会期
31	3	2	1	
32	1	3	1	
33		2	1	
34	1		1	
35	2	1		
36		1		
37	4	2	2	
38	1	2	1	集団栽培期
39	5	2	1	
40	6	2	2	
41	5	3	5	
42		1	7	
43	3	3	5	
44	2	1	2	
45	3	2	3	
46	3	1	2	集落農場
47	2	1	1	
48	2	4	1	
49	5	4	2	

注. 宮田農研20周年記念誌「農魂」による。

表2 ホップ収穫組作業員の配置(昭54)

時間帯別 作業班	1 班 (5.00 11.30)		2 班 (11.20 17.50)		延 人 数		
	男 (人)	女 (人)	男 (人)	女 (人)	男 (人)	女 (人)	計 (人)
収穫作業班①	8	4	6	5	14	9	23
花 摘 班②	7	6	6	9	13	15	28
袋詰出荷班③	1	2	1	2	2	4	6
計 量 班④	2		2		4		4
小 計	18	12	15	16	33	28	61

注. 1. 他に⑤乾燥班に男子2人ずつが3交替, 計67人の作業員。

2. ①～③の作業は, 班長以外は日毎に変更, また1・2班も日毎に替え, 作業内容の理解・変化, 個別農家との労働力競合を回避。

3. 賃金は男子3,000円/6h, 女子2,800円/6h

表3 生産組織の部落会館利用回数

	午前	午前 午後	午後	午後 夜	夜	計
実 数	2回	1	8	21	29	61
比 率	3.3%	1.6	13.1	34.4	17.6	100

注. 1. 昭53, 総利用回数196回

2. 利用人数別: ~9人13回, 10~19人17回, 20人~31回。

を利用した話し合い, “あぜ道”研修等が数多く持たれ, 面接性が拡大され, 活力ある「むら」を構築する一因となった。

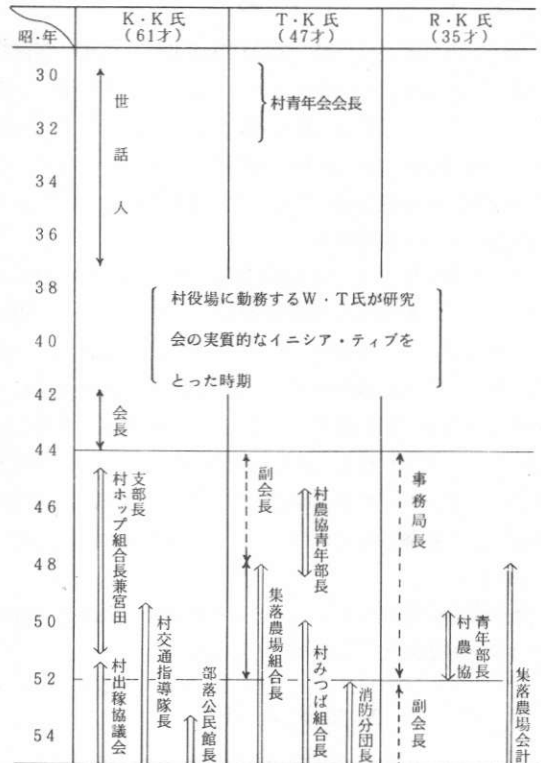
4 「農研」におけるリーダー育成と役割

「農研」の役員の任期は2年であり, 現在まで8回の交替が行われた。初期にみられたいわゆる制度的な家へのこだわりが解消され, 最近の三役(会長, 副会長, 事務局長)は2ha以上・専業農家への集中がみられる。「農研」では“一人一研究”と並んで“世代交替の促進”を活動の柱としてかかげている。事実, 交替毎にリーダーの若がえりが図られ, 20才台の三役もめずらしくない。これによって, 若年層の集団活動への責任ある参加と創意工夫が行われ, 経験豊かな先輩がこれを援助するという, 「農研」の性格

が打ち出されてきた。

以上の関係を「農研」の中心的なリーダー3氏でみたのが, 図1である。次期リーダーを養成しつつ, 会長経験者は「むら」仕事等を分担する。つまり, 「農研」三役のみならず構成員相互の役割と特性に応じて, 機能の分化, 分担が行われているのである。

以上の生産組織活動の諸成果が相乗され, 宮田地区では, 今日にみられるコミュニティ形成が図られてきたといえよう。



注. 1. T・K氏は他に現在農業委員(昭53~), 村稲作協議会長(48~), 村落農場友の会会長(51~)を兼務。

2. 他に会長の経験者は5氏で, 村・集落の役職員を分担している。

図1 リーダーの育成とその役割

引用文献

- 1) 阿部健一郎. 地域農業振興に果す生産組織の意義役割. 日本農村生活研究会東北支部第7回研究会(1979).